

世界自然遺産の管理における自治体の役割（事例紹介）

～主に住民参加、普及啓発の観点から～

- 既存の世界自然遺産地域においても、世界遺産への無関心層が一定の割合で存在するのが実情。一方で、人間生活に由来する外来生物による世界遺産への悪影響、遺産管理と産業や生活との調整の必要性など、遺産と地域生活は密接なつながりがある。
- 遺産価値を地域の宝として、適正に保全していくためには、地域住民の理解と支援が不可欠。
- 既存の遺産地域では、市町村が遺産管理の一翼を担う他、地域住民の理解と支援を得るために、多くの普及啓発や参加型取組が市町村が主体となって企画され、進められている。

1. 小笠原諸島（小笠原村：人口約 2,500 人）

(1) 普及啓発・情報発信

① 村民向け現地視察会の開催

- ・世界遺産への関心向上、遺産管理の課題の共有を目的として、取組現場の視察会を実施。

② 村民ボランティアによる外来種駆除作業

③ 環境教育に関する取組（各機関が連携）

- ・学校教育との連携、社会人や島外の学生を対象とした取組

④ 村民向け講演会の実施（平成 29 年の例）

- ・丸わかり座談会（H28 事業報告、遺産管理計画改定の説明）
- ・世界遺産勉強会
- ・ガラパゴス諸島との交流事業（村職員の現地派遣、ガラパゴスの高校生による地元紹介、ダーウィン研究所所長の講演）など



兄島（無人島）の外来種対策現場の視察



ガラパゴス諸島との交流会

(2) 自然再生

「オガグワの森プロジェクト」（平成 29 年～）

- ・小笠原固有の樹木「オガサワラグワ」をシンボルとした森づくり（取得した二次林 1ha の再生）を村民参加・協働で取り組み、小笠原の自然を身近に感じられる場と機会を創出。
- ・林木育種センターとの連携により、希少種の保護にも貢献する。



オガグワの森プロジェクト

H29. 8. 27：森づくり体験

H30. 1. 20：森の地図づくりイベント

H30. 2. 4：道づくり体験会

H30：植栽や外来植物駆除（予定）

2. 知床（斜里町：人口約 12,000 人、羅臼町：人口約 5,500 人）

- 知床では、斜里町がトラスト運動や管理財団の立ち上げ等、地域における自然保護・管理の取組を主導し、それによって育まれた土壌が、世界遺産登録審査時の評価や、その後の管理体制の充実につながっている。
- 斜里町、羅臼町単独での遺産管理への関わりとは別に、両町が参画する知床財団を通して、普及啓発や遺産管理等の様々な取組を進めている。

<主な経緯>

- ・昭和 52 年：斜里町が日本初のトラスト運動を開始（しれとこ 100 m²運動：全国から寄付金を募り、開拓跡地を乱開発から守る活動。平成 9 年に土地の取得が完了し、森づくり運動（森林再生）に発展）。
- ・昭和 63 年：斜里町が知床国立公園にビジターセンターを建設し、管理者として自然トピアしれとこ管理財団（現：（公財）知床財団）を設立。当初は、自然解説や普及啓発を担う組織。その後、森林再生やヒグマ管理等を担う。
- ・平成 15～18 年：管理財団が知床財団に名称変更し、世界遺産登録を経て、羅臼町が参画。
- ・現在：知床財団として、寄付金（H28 約 1,600 万）、町委託事業、国委託事業等をベースとして、総事業費約 3 億（H28）で、約 40～50 名（任期付を含む）を雇用し、野生生物管理（ヒグマ・シカ）、国立公園管理（利用調整地区の運用や情報発信、普及啓発など）、調査研究、森林再生などの実務を担う。

（1）普及啓発・情報発信（両町、知床財団として）

① 環境教育に関する取組

- ・斜里町：小中学校を対象とした総合学習の実施。
- ・羅臼町：幼小中高の一貫カリキュラムに則り、遺産やクマに関する 11 回の体系的な授業を実施。
- ・ヒグマ学習教材トランクキットの活用・貸出



ヒグマ学習教材トランクキット

② 町民ボランティアによる森林再生など

③ 町民向け講座・講演会・説明会の実施

- ・イエローストーン国立公園（米）、シホテアリン（露）の両世界自然遺産との交流事業
- ・クマ管理に関する座談会（クマ端会議）など



町民座談会（クマ端会議）

④ ビジターセンターでの情報発信、普及啓発

（2）自然再生

「しれとこ 100 平方メートル運動の森・トラスト」

- ・全国からの寄付金や、町内外のボランティアを募り、開拓跡地 860ha の森林生態系の再生（植樹や防鹿柵の設置など）と、それを通じた環境教育等を実施。



森づくりの活動